

ちょっと ブレイク しませんか?



第 33 回 「日本一の大ぼら吹き」 [1964年 日本]

以前にも登場したイソップ寓話の「法螺吹(ほらふき)」と題する小話。

国ではいつも、もっと男らしくやれ、とケチをつけられていた五輪競技の選手が、ある時海外遠征に出て、暫くぶりで戻ってくると、大言壮語して、あちこちの国で勇名をはせたが、殊にロドス島では、オリンピック競技祭の優勝者でさえ届かぬ程のジャンプをしてやった、と語った。もしもロドスへ出かけることがあれば、競技場に居合わせた人が証人になってくれよう、とつけ加えると、その場の一人が遮って言うには「おい、その兄さん、それが本当なら、証人はいない。ここがロドスだ、さあ飛んでみる」

東京オリンピックを目指して、日本期待の三段跳びのホープ初等(はじめひとし)は、今日も猛トレーニングに励んでいたが、アキレス腱切断の重傷を負い入院中、祖先の伝記を手に入れた。“大法螺吹けど、必ず実現して、浪人から一万石の大名に三段出世……”という伝記に勇気づけられ、初等は日本一の大会社「増益電機」に入社を決心した。入社面接で大法螺を吹き、おまけにミス増益電機の可那子にチョッカイを出す始末。結局採用試験に失敗したが、増田社長にあの手この手でご機嫌伺いして正社員に坐った。「釣りバカ日誌」の前奏曲のような展開だ。営業部に配置されたが、「こんな仕事は一月で卒業して係長に昇進」と大ラッパを吹くや否や、睡眠時間三時間で大奮闘、予言通り、係長にスピード出世。過労死しなかったのが救いだ。強心臓を買われて、宣伝課づけとなった初等は、「三カ月で課長になって見せると」宣言、研究技師の井川の冷暖電球の売り込みに、自からTVCMを買って出る。片想いの可那子にも“初等を信じなさい”と強引に求愛。

増益電機は彼の大法螺のお陰で大混乱となったが、信用第一と冷暖電球の量産にふみきった。意外や意外、これが大当りで、初等は一躍秘書課長に抜擢。可那子もすっかり、彼の見事さにのまれて“結婚してよ”といい出す始末。だが初等は“あと二カ月で部長になるから”とまたも吹聴。ナイロニア国から発電機を買うという話を聞くと、商売仇の丸々電機西条社長の愛人をだまし、遂に売り込みに成功して見事部長に昇進した。そして可那子と高砂屋とついに目的を達成するのであった。社内での立身出世は叶ったものの、結婚生活ばかりは期待に反し、尻に敷かれて大ボヤキの毎日だ。

植木等は高度成長期を謳歌し「サラリーマンは気楽な稼業と来たもんだ」と歌いあげ、ハナ肇とクレイジーキャッツというコミックバンドが一世を風靡(ふうび)した。右肩上がりの時代は、初等のような大言壮語(=大法螺)も許されたようだが、実力の結果かどうかは疑問だ。ところで2016年末、花札みたいな名前の合衆国大統領が誕生し世界中が大混乱。日本も史上二度目の東京五輪(オリンピック)を三年後に控え、大法螺吹きに振り回されている有様で、本当に再生できるのか。御臨終とならないことを願いたい。